

ヨーロッパみてある記

- 西洋きのご事情 -

(その5)

瀧澤 南海雄

偉人の墓を踏み付けに

郵便局を出てから旅行社を探して歩き回る。やっと探し出して、ハンブルクからロンドンまでと、ロンドンからアムステルダムまでの航空料金を聞く。約9万円だと言う。予定外の出費で痛い、かわいい妹一家に会うために、エイヤツと清水の舞台から飛び下りるつもりで予約。ただし、持ち合わせがなかったので、次の予定地のブラウンシュウィクの支店で料金を払い、航空券を受け取ることにする。

旅行社から港へ向かって歩いたが、途中で大きな教会に入る。内部は装飾が多く、彩りも少し派手派手しい。パイプオルガンも見るからに立派だ。今夜コンサートでもあるのか、チェンバロの調律をやっていて、繊細で軽やかな音色が、広いホールの隅々にまで鳴り響いて心地よい。

教会の地下には有料の拝観コースがあったので、2.5マルクを払って歩く。薄暗い地下道の壁際には、教会の歴史を示す多くの資料がディスプ

レイされている。一通り見ての帰り道、奇妙なことに気が付いた。地下道の大きな敷石に文字が読み取れるのだ。よくよく注意してみると、沢山の粋が連なっていて、それぞれに人名と年数が彫り込んである。な、なんと敷石に彫り込まれているのは、この教会で働き、そして一生を終えた神父たちの墓碑銘だったのだ。つまり、敷石の下には神父たちが埋葬されていて、私を含めた見物客は、彼らを踏み付けにしながら歩いたことになる。尊い先人の墓を土足で汚すことを、「なんと罰当たりな！」などと、西洋人は考えないのであるうか。

いい加減な情報に怒る

教会を出て、すぐそばのオールドコマースルルームというレストランに入った。この店のことが「地球の歩き方」という本に出ていて、ドイツの伝統的な家庭料理（名前は忘れた）が美味しい、と書いてあったので、それを試食してみようと、山川さんとの相談がまとまったのだ。テーブルに出てきたその食べ物（敢えて料理とは呼びたくない）は、牛肉のムースにマッシュポテトとミルクを混ぜ、バター、塩、胡椒で味をつけて加熱したもののように（ゆるゆるのハンバーグステーキの異を煮たような代物、と言えばその実態が伝わるだろうか）、皿一杯に盛り付けられており、上に目玉焼きが載っていた。うまさのかけらもない上に、後で胸焼けがしたので腹立たしさを増幅した。本にいい加減なことを書いた奴に、速やかな訂正を求める。



写真1 教会地下道にきざまれた墓碑銘

レストランから再び歩いて港に着いた。16時～17時まで遊覧船で港巡り。このコースはデートコースであるらしく、若者のグループやカップルがたくさん昇っている。ドックや豪華ヨットを見て回るのだが、すでに暗くなっており、震えるような寒さの中、我々中年のおじさんカップルでは、体を寄せ合う気にもならず、芯から冷えた。

船を降り、30分以上歩いて街へもどる。クリスマスの屋台が道端に並んでいて、ある教会ではミサ曲の練習をしていた。屋台で馬の顔の口ウ細工を2個買い込む。ついでにホテルへ持ち込むワインを探すが、町中の酒屋は既に閉まっている。仕方なく中央駅まで歩き、キオスクでワイン1本（フランス産、白、1l、7.8マルク）、中身の分からない揚げ物2個と梨2個（1.8マルク）、クロワッサン4個（4.6マルク）を買ってタクシーでホテルへ。

風呂、洗濯のあと、晩飯を兼ねた酒盛りとなる。山川さんは、「僕は酒は得意ではないんで、ワインを1lも飲むなんて自信無いな - 」なんぞ言っていたが、なんの、なんの。1lのワインはアツと言う間に2人の胃袋の中へ。正体を知らずに買った揚げ物は、一つはフライドチキン、一つは薩摩揚げ風の物と判明。梨は固いが日本の長十郎よりは肉質が滑らかで、水分は少なく、甘みは結構あった。

11月25日

6時起床。7時朝食。私は根っからの日本食覚で、食事としてパンを食べることは、小中学校時代の給食以後、一切拒否して来た。だから、旅行中の食事は気掛かりだったのだが、案に相違して飽きないし、体や腹の調子もすこぶる良い。朝から、チーズ（5種類ぐらい並んでいる）、ハム・ベーコン・ソーセージ（これらも合わせて10種類程度）、スクランブルエッグ、サラダ、果物、パン（3～5種類）、ミルク、ヨーグルトなど、食べられるだけ胃に入れてしまう。毎日長時間街を歩き回り、適当に酒を飲み、ぐっすり眠っている。これで朝飯がまずい訳がない。それにドイツの畜

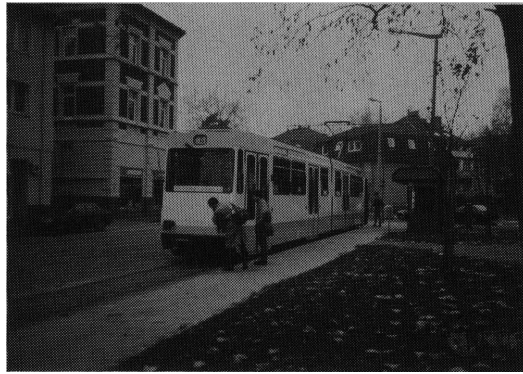


写真2 市内を走る市電

産製品はうまいのだ。朝から、ゆっくり時間を掛けて、しかも沢山食べることがどんなに幸せかということ、この旅行に出て初めて知った。

鈴木さん登場

7時40分にチェックアウト。タクシーで中央駅に行き、14番ホームからベルリン行きの1等車両に乗り込む。8時25分、定刻に列車はホームを離れた。相当のスピードで列車は走るが、レールの継ぎ目やポイントでの雑音が聞こえない。もちろん揺れもなく、非常に快適である。窓の外には美瑛の丘陵地帯を思わせる風景が続いていた。

ハノーバーで乗り換え、10時35分にブラウンシュワイクへ着いた。駅の待合室で少し時間を過ごしていると、一見山下洋輔（ジャズピアニスト）に似た顔の青年が現われた。口髭を蓄え、背は高くはないが、がっちりした体を持ち、胸を張って歩く姿は、カンフー映画のヒーローか古武士を思わせる雰囲気を持っている。それが鈴木さんであった。彼は以前にザドラジル博士の下に留学した経験があり、我々と博士の結び付きを手伝ってくれただけでなく、ブラウンシュワイクから次の訪問地であるワイデンまで、自家用車で案内してくれるために、ゲッチンゲンから車を飛ばして来てくれたのだ。山川さんとは旧知の間柄だが、私とはこの時が初顔合わせである。

酸性雨の威力

彼の車でホテルへ。11時なのでチェックインで

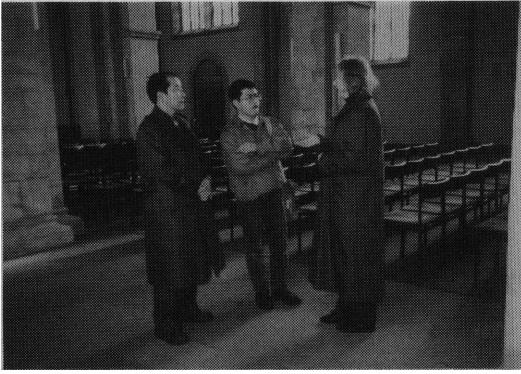


写真3 教会の中で。中央が鈴木さん



写真4 酸性雨で傷んだ石像

きず、荷物を預けて街へ出る。教会の塔があちこちに見える。そのうち、傾いた塔（まるでピサの斜塔のよう）を持った教会にぶつかった。丁度日曜日で、ミサが終わったらしく、人々が教会から出てくるところだったが、「入ってよいか」と聞くと、「どうぞ、どうぞ」と招き入れてくれ、品の良いご婦人が説明に当たってくれた。内部はまったく飾り気が無く、長椅子なども質素そのものである。「シンプルで、素敵な教会ですね」と褒めたら、「そう、そう。私もそこが好きなのよ」と、わが意を得たりの表情。そして、この教会が第二次世界大戦中に破壊されたこと、それを信者が長い間協力してやっと修復したこと、などを誇らしげに語ってくれた。そのうちに、妙なものが壁際に並べられていることに気が付いた。近付いてみると、形の崩れた石の人形のようなものであった。「これも大戦中に壊されたものですか？」と尋ねたら、「とんでもない。これらは教会の外回りを

飾っていた石像ですが、酸性雨で傷められたのです。それで、酸性雨の恐ろしさを知ってもらうために飾っているのです」との答えだった。石像は素材が大理石なので、硫酸や硝酸を含んだ酸性雨が当たれば溶けて炭酸ガスになってしまう。傷むのは当然とは言え、ヨーロッパにおける酸性雨の被害の酷さを如実に感じさせるものであった。

この教会の後に行き当たった二つ目の教会では、コンサートやCDの宣伝ポスターが壁に貼ってあった。どうやらこの教会で、今夜コンサートがあるらしい。入り口に置いてあったパンフレットを読んでいた鈴木さんが、「このパンフレットには町中のコンサートの予定が載っているんです。今夜はこの教会で17時からオルガンのコンサートがあります。さらに別の教会でもコンサートがあるようです。この町では、しょっちゅうコンサートがあって、しかも非常に安いんです」と話してくれた。

また歩いて、ドームと呼ばれる城跡に行った。そこには城主の菩提寺として建てられたと思われる教会があった。中には沢山の折りたたみ椅子が並べられ、若い人達がせっせと番号札を貼り付けていた。そこで、「今夜コンサートがあるのか」と尋ねると、「ブラムスのレクイエムをやる」と教えてくれた。

本当のビールに出会う

昼食は鈴木さんのお薦めで、この地方の冬の郷土料理である“ケールとソーセージの料理”を食べることに決め、こじんまりとしたレストランへ入る。さて、ビールを注文するに当たって、「ドイツのビールがあんまりまずいので、がっかりしちゃった」と鈴木さんにこぼしたら、「それはホテルで飲んだからですよ。本当にうまいビールはホテルでは飲めないんです。だけど、このレストランなら飲めるはずですよ。」と言って、ウェイトーに何やら注文した。

間もなくウェイトーが運んできたタンブラーには、濁った薄茶色の液体が満たされていた。これまで飲んできたような透明なビールではなく、明

らかに濁っているのだ。鈴木さんによると、このビールはヘーヘルワイゼンと言い、酵母の酒、という意味だとのこと。つまり、濾過を簡単に済ませ、酵母をそのまま残したビールである。

一口飲んで、うなった。うまい！ 猛烈にうまい！！ コクがあり、酵母の香りがぶんぶん高く、まるやかで、わずかに甘みさえ感じられる。これが本当のビールだ。これに比べたら、今まで飲んできたビール（日本の物も含めて）なんぞ、カスみたいなものだ。こんなうまいビールを毎日飲めるドイツの人達は何て幸せ者だろう、と心底羨ましかった。もちろん黒ビールもあり、これまた、すこぶる付きのうまさだった。

料理は、やや酸っぱい茹でたケール（キャベツの一種）の上に、じっくりスープで煮込んだ豚肉の固まりと太めのソーセージが乗っていて、マスタードが添えられていた。言わば“ドイツ流おでん”である。塩味も適当で、舌触りも優しく、日本人にも違和感のない美味しさ、と言ってよい。鈴木さんのお陰で舌と胃袋が大満足、ご馳走さまーツ。

コンサートに行く

宿へ帰ってチェックインし、部屋で明日からの予定を3人で打ち合わせる。打ち合わせの中身は以下のとおり。

明朝9時に私と山川さんはザドラジル博士を訪ねる。鈴木さんは今夕ゲッチングヘンへ一度帰り、明日の正午にザドラジル博士の所で我々と落ち合う。午後、街で銀行と旅行社に寄ってからワイデンへ向かう。途中適当なところで宿を取る。27日は午後からワイデンのヒラタケ生産企業を視察して宿泊。28日にはニュルンベルグへ移動して市場で野生キノコを探した後、我々は列車でハンブルグへ、鈴木さんは車でゲッチングヘンへ戻る。

16時に鈴木さんは帰って行った。

16時30分に山川さんと街へ出る。オルガンのコンサートが行われる教会へ行き、ドアを押すが開かない。おかしい。隣の建物の入り口が開いていたので覗いてみると、大きな部屋に宗教画が所狭

しと並べてあり、売り子らしい男が2人いた。

「コンサートのことを知っているか」と尋ねたら、「19時30分から始まる、と聞いている」との答えだった。どうやら17時からと言うのはパンフレットのミスプリントらしかった。

そこで城跡の教会へ向かったのだが、幾ら歩いても行き着かない。しょうがなく、通りすがりのカップルに道を尋ねてやっと行き着いた時は17時30分、レクイエムは既に始まっていた。こっちが17時開場だったのだ。無念！

仕方なく元の教会へ戻る。直ぐそばに中華料理店を見付けて、まずは腹ごしらえ。中国人と思われるウエイトレスが注文を取りにくるが、ドイツ語しか話せない。メニューもドイツ語で書かれている。「英語を話せる者はいないか？」と問うと、若い男のウエイターを連れてきたが、さっぱりらちがあかない。しかし、これは傍目にも奇妙な光景であろう。明らかに東洋人の顔を持った2人の男が、片方はドイツ語で、もう一方は英語で話をし、しかも皆目意志を通じ合わせることが出来ないでいるのだ。

最後に店の主人らしき老人が出てきた。この人は少し英語が話せたが、私に輪を掛けたカタコトであった。例えばこうである。私が「この料理は何を使っているのか」と聞くと、「シュリームとバンブーとマッシュルームです」と答える。「シュリームとは何だ。シュリンプのことか」と聞くと、「シュリームはシュリームです」と言う。「ロブスターではないのか」と聞くと、「ロブスターは大きいシュリームで、シュリームは小さいロブスターです」と答える。「はら見る、やっぱりシュリンプのことじゃないか」と言う具合。

やっと、海老と竹の子と茸の料理、ワンタン、自飯、ビールを注文できた。残念なことに、ヘーヘルワイゼンは置いてないと言う。

海老と竹の子とシイタケの炒め煮は味が濃すぎ、量も多くて残した。ワンタンは水ギョーザ風。ビールは普通のタイプだが、ハンブルグのホテルで飲んだ物よりはましな味がした。

19時20分に教会へ入り、受け付けで入場料を尋

ねたら、無料だと言われて感激。机の上にCDとLPが乗っていて、この教会のオルガン演奏を録音したものだと言うので、CDを3枚買う。聴衆はポツポツと集まり、約20名となった。たった20人でオルガンの演奏を楽しむなど、聞く側にとってはなんとも贅沢な演奏会だ。

19時30分。突然オルガンがブラームスのソナタを演奏し始めた。開演の挨拶もなく、拍手もない。2曲目からはオルガンを伴奏にテノールが歌い出した。このテノールの声量がもの凄く、歌声がオルガンを圧倒するように響き渡るのには、心底感嘆した。

オルガンの音は高音が比較的きつめ。ウブサラでのゆったりとした響きとはかなり違っていた。もちろんホールが大きさが段違いであるから、当たり前と言えば、当たり前だ。しかし、ホールが狭く、相対する反射面が近いせいも、ここでの残響はウブサラより格段に長かった。

20時40分、コンサートはこれまた突然に終了した。やはり拍手はない。聴衆は黙ったまま、一人、二人と帰って行く。不思議な光景だが、要はオルガンと歌による神への祈りを傍らで聞いただけ、と言う感じなのであろうか。山川さんは有難さの余りか、途中から魂が昇天していたようだ。

21時にホテルへ帰り、風呂、洗濯、就寝。

国立土壤微生物研究所訪問

11月26日

6時起床。チーズ、生ハム、バター、コーヒー、



写真5 ザドラジル博士とリサ

ヨーグルトで朝食。宿泊料は2人分で70マルク。安い！ タクシーで研究所へ。研究所は広い林の中にあった。玄関で案内を請うと、まもなく別棟からザドラジル博士が走るように現われた。挨拶の後、博士の部屋に案内され、「狭い部屋だけど、その代わり話しは近いよ」との冗談。そして、「私はポーランドに生まれ、ポーランド語をまず覚えたが、ソ連の侵攻後にはロシア語の勉強を強いられ、ドイツに亡命してからはドイツ語を勉強し、やむをえず英語も使っている。だけど英語は余り勉強していないので、一番へたくそなんだよ。それで、息子はアメリカに留学させて、英語を勉強させているんだ」などとおっしゃる。それから、「まず、研究所の中を見てもらってからディスカッションしよう」との提案があり、共に部屋を出た。丁度隣の高校から研修に来たばかりの愛くるしい女の子（名前はリサ）も一緒に、廊下の壁に貼ったパネル写真を用いてこれまでの博士の研究を説明して下さる。

博士が食用菌の原木による栽培研究を始めたのは1970年のことである。1975年からは麦稈を利用した食用菌の栽培研究に着手し、その後、飼料化の研究に方向交換した。

担子菌による脱リグニンで重要なのは、使用する菌株の系統、基質、水分と基質の比、温度（例えば、マンネンタケは10~15 でないと、リグニン分解能が低い）、ガス濃度（酸素が20%の条件下で、窒素は高い方がよい。炭酸ガスは余り関与しない）などである。

これらの研究の一部の成果についてはコピーを、全ての業績については文献リストを受領した。また、麦稈の飼料化に関しては、博士が中心となってヨーロッパと研究者がプロジェクト研究を行い、その結果は報告書として出版されていることが分かった。

さらに、博士は基礎実験の結果を用いて麦稈の飼料化プラントを設計し、小規模ながら完成させていた。見せて頂いたプラントに含まれるものは、培地混合機、殺菌槽、培養槽などで、培養槽は温度、水分、ガス濃度（酸素と窒素。炭酸ガス

に関しては、装置が高価なため未設置とのことを一定に保つような工夫がなされており、ヒラタケ菌糸を用いれば、1週間で飼料を製造出来るとのことであった。

しかし、飼料化に関する研究の中で、製造した飼料を実際に牛や羊に与える飼育試験はこれまで系統的に行われておらず、大きな課題として残っているため、今後の北海道の成果に期待するとのことであった。

また、「このプラントには相当金が掛かったけれど、政府は一銭も出してくれなかったよ」などと言われる。その後、シャンピニオンの栽培実験棟も見せて頂く。

さらに基礎実験室では、実験器具や、人工気象室（ヒラタケが発生していた）、菌株保存室（日本のシイタケ種駒もあった）などを見せて頂いた。

居室へ帰り、山川さんの稲わらの飼料化試験のデータと、私のシイタケ菌床栽培試験のデータを材料にディスカッションする。ティーブレイクには日本茶をご馳走すると言い、「どうやったらおいしく入れられるか」と問われたので、葉の分量、湯の温度、時間などを説明。すると、リサに向かって、「今からお茶の儀式をやるから、君は芸者の役を勤めたまえ」などと冗談を飛ばされる。大変面白い先生だ。

12時に鈴木さんが着き、共に食堂へ案内されて昼食をご馳走になった。食堂は離れた場所であり、途中は素晴らしい散歩道になっている。

食事の後は、先生が自ら運転するオペルで、場内を一周した。

ここの敷地は、戦前はドイツ軍の飛行機研究所兼飛行場だった所で、戦後2年間イギリス軍の飛行場として用いられていたが、イギリス軍が撤退した後、土壤微生物研究所が設立されたという。敷地内には14の研究施設が散在し、野菜や家畜の改良、栄養学、土壌学、遺伝学などの研究を行っている。牛、豚、羊、鶏も飼われていて、牛舎も見せていただいた。大変に広大で、しかも多くの樹木に囲まれた美しい環境は、羨ましい限りであった。



写真6 国立土壤微生物研究所の構内

別れの挨拶の前に、「ワイデンのヒラタケ生産企業を見学したいのですが、知り合いがいなくて連絡が出来ません。先生の存じよりの方がおられたら紹介して頂けませんか？」とお願いしたところ、「大した知り合いもないのだよ」と暫く躊躇された後、「君達だけではコンタクトが難しいのか？」と改めて聞き直されて、受話器を取られた。暫く話しておられたが、「電話の相手（社長）は明日からハンガリーとベルギーへ出張するので、来週でなければ案内出来ないと言っている」と言いながら受話器を置かれた。つまり、我々の見学申し込みは、体よく断られたらしい。しかし、当たって砕ける！我々はワイデンへ行き、直接交渉することにした。

博士は気の毒に思われたのか、もう1回どこかへ電話をされた後、「ワイデンの前にここを訪ねてごらん。小さなヒラタケ生産農家だけど歓迎してくれるから。21時までなら待っているとのことだ。ここから4～5時間で着けるだろう」と住所と電話番号を書いた紙と共に、道路地図にしるしを付けて渡して下さった。

最後に貴重な時間を割いて頂いたことにお礼を申し上げたところ、「私の時間は大して貴重ではないよ。政府が私の研究に金をくれないのが、その証拠さ」とまたまた冗談。

14時15分に研究所を離れたが、博士はわざわざ寒い中を表まで出てこられ、我々の車が見えなくなるまで手を振って下さった。

（林産試験場 微生物利用科）